

---

## 【会長講演】

### 「エイズと25年 - 私的考察」

池上千寿子 (特定非営利活動法人 ふれいす東京)

■座長：岩本愛吉 (東京大学医科学研究所・エイズ学会理事長)

「病気より人のほうがこわい!? AIDS ヒステリーの教訓」(医学書院・助産婦雑誌 Hawaii Report, 1983年10月号) 私がはじめてエイズに関して書き日本に送った記事です。当時まだ HIV は特定されず、同年6月のサンフランシスコゲイパレードではパレード終了後の清掃職員が紙製の使い捨て上下服をつけるというありさまでした。

4年後の1987年「溢れる参加者、揺れる政治」(看護学雑誌9月号) というタイトルで第3回 AIDS 国際会議 (ワシントン DC) 報告を書きました。閉会式の朝「医学と科学のために起立しよう」という回状が配布されたのです。閉会式でのアメリカ政府代表挨拶のときに起立して背を向け、集団検査しか言わないアメリカ政府の無知偏見は科学と医学への侮辱であるから抗議のメッセージを世界に発信しようという呼びかけでした。

エイズは初めから社会と政治に鋭い問いをつきつけました。

なぜならエイズは、社会の弱者(病者あるいはゲイ)しかも既にスティグマのついた弱者からはじまったこと、性感染であること、エイズすなわち死ではじまったこと、この三位一体ゆえに、必要かつ適切な対応をはじきとばし、それは今も続いているからです。

この三位一体は有害無益な「否定」を生み出します。問題の存在の否定、リスクの否定です。ところが一般多数派にも関係するセックスがからむとなると今度は「モラルとの妥協」を捻り出します。たとえば婚前純潔一夫一婦の ABC 作戦はおおかたの人間の行動になじみません。しかしそれ以外の対策はノーとなれば、そのしわよせを女性と子どもがうけるのです。これらのねじれた対応は同時に社会の価値やしくみを見せつけてもくれます。人はデータの集積では理解できないことを十分に示してくれます。

We are not the problem but a part of solution. HIV 陽性の人たちが宣言したこの当事者性と関係性はエイズ対策のパラダイムを変えました。

エイズからなにをいかに学ぶか、学びきれるか、これが一貫した課題です。エイズは社会を映す鏡ですが、それは社会を変える力の源にもなりえるのです。

---